

第11回 第2章 武家社会の形成と生活文化のめばえ

鎌倉幕府の誕生

執筆・講師
本郷和人

学習のねらい

武士の政権は幕府というかたちになって安定した。少し前は「いいくにつくろう」、1192年が鎌倉幕府の成立の年とされた。それが今は「いいはこ」1185年説も示されている。なぜこうした違いが生まれてきたのか。幕府とは何か、ということを考えながら、見ていくことにしよう。

幕府の成立

幕府は武士の棟梁（リーダー）を中心とする、軍事集団である。そのことを重視するなら、源頼朝が南関東の武士を従えて鎌倉に入った1180年、すでに幕府は誕生していたことになる。ただし、それはそれまでの「公的な」権力である朝廷の認めたものではなかった。朝廷に認められて初めて、頼朝の軍事集団も「公的」な性格を帯びる。この観点を重視すると、たとえば1183年10月、朝廷が幕府の働きを認めた命令書を出したことで、幕府が成立したとする見方が生まれる。また、幕府と言えば、全国に置かれた守護と、荘園ごとに置かれた地頭に支えられた政治機構であるという点を重視すると、朝廷が守護と地頭の設置の権限を認めた1185年、幕府は全国に影響力を持って樹立された、と考えることができる。あるいは幕府は東国を支配するところに特徴があるのだとすると、頼朝が征夷大將軍に任命された1192年説が有力になる。

將軍と御家人

幕府のトップを將軍という。これは征夷大將軍に任命されているかどうかにかかわらず、便宜的にそうよぶことが多い。將軍に仕える武士を「御家人」とよぶ。家人とは家来の意味だから、將軍に仕える特別な武士、ということになる。

御家人は將軍のために命がけで働く。これを「奉公」といい、その具体的なものの代表は戦場に赴いて戦うことである。御家人がそうして忠節を尽くした場合、將軍は御家人に「御恩」を与える。その代表は土地である。「いまおまえが支配している土地はまちががなくおまえのものだ。おまえの所有権が侵害されたら、將軍である私が守ってやる」これが「本領安堵」である。また、働きに応じて新しい土地が与えられることがある。「新恩給与」である。土地を

介した「御恩」と「奉公」の関係。将軍と御家人のこの関係が主従制であり、こうした主従制から成り立つ社会制度を封建制度という。

鎌倉新仏教と鎌倉文化

鎌倉時代を迎えたときに、京都の貴族のあいだで熱心に信仰されていたのは天台宗と真言宗であり、またこの教えに基づく有力寺院が建てられていた。けれども平安末期からの社会の混乱によって救いを求めたのは貴族だけではなく、十分な教養をもたない武士や教養も財力ももたない多くの庶民であった。平安時代末期から鎌倉時代にかけて、こうした人々に対して、わかりやすい宗派が次々に開かれていった。南無阿弥陀仏と唱えれば極楽往生ができると説く浄土宗、浄土真宗、時宗。また法華経の功德を重視する日蓮宗。座禅でだれでも修行ができると説く禅宗などである。

文化についていうと、この時期の文化の主体はなお貴族であったが、そこに武士の文化が加えられていった。たとえば仏像を見ると、平安時代以来の優美な仏像は依然として作られていたが、それだけではなく、武士との関係が深い運慶らが作る力強い表現が生まれるのであった。

